

ニュースレター

No. 32

新年明けましておめでとうございます。

年頭に当たり、会員の皆様のご多幸とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

昨年 12 月 8 日・9 日の両日には、高松市の香川大学で通算第 45 回の例会が開催され、熱心なご発表、質疑を聞かせていただきました。各地よりお集まりいただきました会員の皆様、そして例会から懇親会、翌日の旅行までお世話下さいました香川大学の諸先生方には厚くお礼申し上げます。

新しい年、平成 14 (2002) 年が会員の皆様に取りまして、希望に満ちた実り多い年となりますよう、役員一同努力を重ねていく所存です。これまで同様に、会員の皆様の暖かいご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成 14 年 1 月

日本英学史学会広島支部支部長 松村 幹男
他役員一同

平成 13 年度第 2 回支部例会、高松大会開催

去る 12 月 8 日(土)、9 日(日)の両日、竹中龍範理事(香川大学)の格別のご尽力により、本年度第 2 回(通算第 45 回)例会が英学にゆかりの四国の地、高松市で 14 人の参加者を集めて開催され、全国大会報告と 2 件の研究発表があり、実り多い研鑽の集いとなった。初日の大会のプログラムは次頁の通り。

また、今回は例会終了後、あじ温泉観光ホテル「海のやどり」に場所を移して、支部の忘年懇親会も行われ、夕暮れの瀬戸内海の景色を眺めながら、和やかな親睦の会となった。

翌 9 日(日)には、ホテルのご好意でマイクロバスを出していただき、高松市東隣の志度町にある平賀源内旧宅を見学した。こちらの方へも多くの会員が参加し、穏やかな一日を史跡見学で過ごした。

日本英学史学会広島支部高松研究大会プログラム

日時 12月8日(土)午後2～5時・12月9日(日)午前
場所 香川大学教育学部会議室(〒760-8522 高松市幸町1-1)

第1日 12月8日(土)

会場受付(13:30～)

開会行事(14:00～)

開会挨拶 支部長 松村 幹男

全国大会報告(14:15～)

「第38回日本英学史学会全国大会(萩研究大会)を顧みて—研究の展望」

比治山大学 寺田 芳徳

司会 広島大学 小篠 敏明

(休憩)

研究発表(15:10～)

(1)「竹原常太の英語教育」

香川大学 藤井 昭洋

司会 広島大学 田中 正道

(2)「第5回中国五県春期英語特別講習会(1960)について」

ノートルダム清心女子短期大学 山本 勇三・克子

司会 安田女子大学 多田 保行

研究協議

閉会行事

閉会挨拶 副支部長 小篠 敏明

第2日 12月9日(日)

午前中 平賀源内旧宅(志度町)

日本英学史学会第38回全国大会(萩大会)を顧みて—研究の展望

寺田芳徳先生のご発表から

今年10月20日(土)～22日(月)の三日間に亘って萩国際大学を会場に実施された日本英学史学会第38回全国大会は、出席者60名全員のエネルギーが全

国大会として結集されたものであったと言える。実行委員の方々のご努力・ご活躍に加えて、山口県教育委員会をはじめ、萩市、萩市教育委員会、そして市立図書

館、萩高等学校長など地元の方々の心温まるご協力とご支援により、大盛会のうちに終了した。大会委員長の重責を果たされた寺田芳徳先生より、大会開催の準備およびその成果、大会プログラム作成上の苦勞、特別講演と研究発表、今後の英学史研究の課題と展望等々につき詳しいご発表があった。萩市では、1973（昭和48）年に日本英学史学会第10回大会が、1996（平成8）年には英語教育史学会が開催された歴史があり、その実績の上に今回も、英学関係文献資料の展覧が行われた。その詳細は、『萩市立図書館蔵 山口県立萩高等学校蔵 幕末・明治英学関係文献資料[展示一部覚書・解説/拾遺]』（撰者 寺田芳徳）なる単冊子（66頁）として残された。その際の珍しい展示品の中で最も注目すべきは、萩高等学校図書室の至宝とも称すべき蘭書「シ

ヨメール百科全書」（端本1冊、16冊揃本）の借り出しが許可されたことであった。我が国の近代国家形成に向かったの研究がどのように進んでいったかを示す monument の一端が紹介されたことは特筆大書すべきことであった。筆者も萩大会に参加し、萩市立図書館に展示されていた、今日では誠に得難い貴重な資料に目を見張った者の一人であるが、これらの資料を今後どのように活用していくかが我々に残された課題であると実感した。寺田芳徳先生はご発表の最後に、今後の英学の方向として温故知新の精神を忘れず、歴史的な問題意識、全方位的な視野を持ち続けることの重要性を強調されて、持ち時間オーバーになるほどの熱っぽいご発表を終えられた。（風呂 鞏・比治山大学）

竹原常太の英語教育

藤井昭洋先生のご発表から

藤井先生のご発表は、竹原常太（1879-1947）の英語教育上の業績を辿り、中でも、基本語彙論を中心とした教材編纂観を明らかにするものであった。藤井先生が15年前に発表された論文「竹原常太の英語教育論 その基本語彙論をめぐって」（垣田直巳先生御退官記念事業会編（1987）『垣田直巳先生退官記念 英語教育学研究』大修館）の続編として、大変興味深いものであった。

ご発表では、充実した竹原の略歴や著作暦のご紹介とともに、彼の辞書作りの苦勞話や、二人の娘を「和」「英」と名づけたエピソードなど、寡黙だったと言われる竹原の、知られざる人間像に迫るお話を聞くことができた。さらに、竹原の

著作の抜粋を中心とした豊富な資料をレジュメでご紹介くださり、アメリカの語学教育合理化運動の影響を受けて基本語の確立を目指したことや、基本語を教科書中に盛り込む際に新語数と総語数の比率に注意を払ったことなど、竹原の教材編成の理念を詳しく解説して下さった。

基本語彙表の歴史に関心を寄せる評者にとって、竹原の名前は常にソーンダイク（E.L.Thorndike）とともに浮かんでくる。ソーンダイクが1921年に発表した1万語の頻度表（読書本位）とホーン（E.Horn）が1927年に発表した1万語の語彙表（作文本位）をもとに、語の重要性を数値化して各語に付した『スタンダード英和辞典』（1929）を出したのが竹原である。また、

ソーンダイクが 1931 年に 2 万語の頻度表を発表した後、その日本語版である『ソーンダイク基本英語単語』(1934)を出版した。この単語集の発表について、当初は、竹原自身がソーンダイクやホーンなどの各種語彙表 40 以上を総合して作成した「総合基本語表」の公刊を意図していた。ところが、ソーンダイクの 2 万語の頻度表が自身の目的を果たしたものと判断し、その日本語版の出版に切り替えたという。では一体、ここで竹原自らが作成した「総合基本語表」は何らかの形で公表されているのだろうか。また、*The Standard English Readers*(1932)の巻末語彙表には、その編纂の際に 12 種類の語彙表を合理的に総合したという「総合基本語彙表」への言及があるが、それとは同じものだったのだろうか。興味は尽きない。

竹原研究に重要な役割を演じる彼自身の著作のうち、特に教科書の編纂趣意書の類は「非売品」であった。70 年も前に配布された現物を今入手することは難しいが、それらを発表会場で回覧して下さったのには感動した。当日手にとって拝見した『学習教材の合理化』(1932)、『中等学校英語教材の科学的編纂法』(1936)には、頻度ランクと教科書語彙の関係や、総語数と新語数の比率など、多くの計量的なデータや充実した語彙表が掲載されている。教科書の語彙に関わるデータの作成には大西雅雄氏の関与が大きかったようであるが、教科書とその語彙データとの関係をこのように詳細に研究した「趣意書」は、教科書の歴史的研究を進める上で第一級の資料と言えるだろう。

英学史、英語教育史の研究者にとって、こうした古い資料は不可欠だが、資料が古くなればなるほど、その入手は困難となる。さらに、それを丹念に読むために

は、原本からコピーすることが(少なくとも評者にとっては)不可欠である。原本が自分の所有するものでなければなおさらだ。その原本が、図書館や大学の「公的」なものであれば、心置きなくコピーを依頼したり、自ら行うこともできる。が、「私的」なものであれば、入手にいたるご苦労が偲ばれるだけに、それを痛めてコピーするには罪悪感を伴う。コピーの結果、一冊の本が 3 分冊くらいに分離してしまう可能性もあるからだ。これは怖い。そこでインターネットで資料の在り処を探し、罪悪感を感じない手段でコピーを手に入れる方法を画策する。評者も英学史研究者のはしくれとして、竹原の著した「非売品」を「公的」な場所で探してみた。『語学教育の合理化』(1930)はインターネット上の NACSIS Webcat で、『中等学校英語教材の科学的編纂法』(1936)と『高等女学校英語教材の合理化』(1934)は、国会図書館の特別閲覧室で探し当てた。残るは『学習教材の合理化 附スタンダードリーダー編纂趣意』(1932)である。

今回のご発表は、評者が継続中の基本語に関わる歴史研究と、現在進行中の歴史的な教科書分析に関する共同研究と、そのいずれにとっても非常に示唆に富むものであった。藤井先生に改めてお礼申し上げたい。最後にひとつだけ先生にご無理をお願いするとすれば、論文化に際して略歴の記載に西暦を併記して頂ければ、という点である。もしかするとこれは、西暦と元号を行き来する足し算と引き算が苦手な人間の、誠に勝手なお願いかも知れない。ただ、西暦で統一された参考文献への参照や、他の論文との併読の際に便利だと思うのですが。(馬本勉・比治山大学)

第5回中国五県春期英語特別講習会(1960)について

山本勇三先生のご発表から

昭和30年代は英語科教員の研究・研修活動が活発であった。特にELECは、Oral Approachの理論とその指導技術としてのPattern Practiceの普及に大きな役割を果たしたが、地方でも県教委が、大学や外国人教師の協力を得て、実技講習会を開くようになった。

山本氏夫妻は、昭和35年に竹原で行われた第五回中国五県春期英語特別講習会に参加されたが、その時の貴重な資料をもとに、思い出深く会の模様を再現された。当時の学習指導要領とそれに沿った広島大学附属中での研究授業（松村幹男先生担当）の教案も紹介された。

一世を風靡したPattern Practiceではあったが40年代後半にはいって急速に勢いが衰えていった。スピードと形式を重んじすぎて意味を軽視したこと、一つの理論や指導方法にかたよることを嫌う文部省の施策（全国学力テスト、教育課程研究集会など）が具体化され始めたこと、などがその原因であろう。

長年、中・高・大での教育実践、県教委指導主事など豊富な経験を持つ山本氏だけあって、言語活動を重視する余地地な言語材料の定着を忘れた現在の授業へのきびしい批判も交えた発表は、参加者を首肯させるに十分であった。（多田保行・元安田女子大学）

『英学史論叢』発行と原稿募集について

竹中理事のご尽力により、『英学史論叢』第5号が発行されました。今年も引き続き第5号の刊行に向けて、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。研究論考、英学史随想、英学史時評、書評等、何でも自由です。多数の応募をお願いいたします。送り先は竹中理事まで。締切は3月25日の予定です。詳しくは『英学史論叢』の執筆要項をご参照下さい。

会費納入について

平成13年度分の会費3,000円をご納入いただきますよう、よろしくお願いいたします。

郵便振替口座 01360・9・43877

加入者名称 日本英学史学会広島支部

日本英学史学会広島支部事務局

〒739-8524 東広島市鏡山1丁目1-1

広島大学教育学部英語文化教育学講座内

深沢 清治

電話・ファクス (0824) 24-7058

E-mail: sfukaza@hiroshima-u.ac.jp